

アメリカのコミュニティ・
カレッジを訪ねて

塩崎 千枝子

全米のコミュニティ・カレッジのなかでもNo.1の誉れ高いマイアミ・デイド・カレッジをこの目で確かめようとフロリダに飛んだのは、カリフォルニア州での視察を終え、調査の旅も行程のほぼ半ばをまわった頃であった。二つの調査班がここで合流したために、総勢5人という賑やかな視察になった。我々は、肌にとわりつく南国の湿気を感じながら、ハイチからの移民で自らもマイアミ・デイドの卒業生であるという、まさにフロリダ高等教育システムの成功物語の典型ともいべきしなやかな女性の中堅管理職者の案内のもとに、同校の4つのキャンパスのうちの3つを見てまわった。

マイアミ・デイドはフロリダ州の28のコミュニティ・カレッジのひとつで、在学者数3万7千人を数える全米でも最大級の公立短期大学である。市内にあって、少しばかりの芝生と白い鉄筋の近代的な校舎からなる機能的なキャンパスには学生が満ちあふれ、創立25周年を祝う各種の記念行事のちらしがキャンパスを賑わしていた。ゆったりと緑の広がるカリフォルニア南部の学園風景を見なれた眼には、都会型のキャンパスの若々しい活気が新鮮なものに映った。

フロリダ州のコミュニティ・カレッジは、他の州に比べ、伝統的に4年制大学と強い接続関係にあるのが特徴である。これは、州立大学の数が9校と少なく、しかもその大半はつい最近まで学部の前期課程を持たなかったこと、そして州の法律により、準学士号(A

A) 取得者には州立大学への編入が保証されていることによるものである。しかし、最近ではフロリダ州においてもこうしたコミュニティ・カレッジの伝統的な役割にかげりが見えるようになり、現在ではむしろ完成型の職業教育課程に在籍する学生の方が多い。

こうしたなかでマイアミ・デイドの学生の4分の3は依然としてトランスファー（四年制大学への編入）を目的としており、他校に比べて若くてフルタイムの学生が多い。同校は1978年以降、教育改革でカリキュラム、教員および学生に対する引締めを強化することにより一般教育のレベルの維持に努力しており、マイアミ・デイドに対する高い評価は、ひとつには同校が学部前期課程として優れた一般教育プログラムを提供している点にあると言える。

しかし、マイアミ・デイドを際立たせているのは一般教育だけではない。我々訪れる者を圧倒して止まなかったのは何よりも多様なニーズに対して積極的にそして柔軟に対応する地域短大のしたたかさであった。周知のように、コミュニティ・カレッジは公立機関であり、州によっても異なるが、例えばフロリダ州の場合、各短大の予算の70%は州財政に頼っている。しかし、そこには我国の公立教育機関に時として見られるような画一性も、またのんびりとした『親方日の丸』的な雰囲気も余りない。特にフロリダ州ではローカル・コントロールの伝統が依然として強く、まさに『コミュニティ』のためのカレッジとして、短大は地域のニーズへの対応および地域や企業との協力に対してきわめて積極的である。そしてこの点でもマイアミ・デイドは全米一の名声に恥じないダイナミックな教育を実践している。

我々が訪問した同校の3つのキャンパスのうち、ひとつは完全に一般教育中心のキャンパスであったが、他のふたつは学生の7割以上が非白人という国際キャンパスであり、医療関係の職業資格を付与するメディカル・キャンパスであった。マイアミ・デイドは、伝

統型のアカデミックなプログラムを提供する一方、もう一方では絶え間なく流れ込み続ける移民に対し、E S L（英国が母国語ではない人々のための英語教育）を基礎にアメリカ社会へのメインストリーミングを図る補修および職業教育を提供し、また高齢人口が多い土地柄から常に需要が高い医療分野の人材を養成するために、医療センターのすぐ隣で技術教育を提供しているのである。

地域や企業およびビジネスに対する短大側の積極的な姿勢を端的に表わしているのがマイアミ・デイドが一年程前に開設した『ビジネス・企業センター』（Center for Business and Industry）である。同センターは短大と地域や企業との間のパイプ役として、ニーズの吸い上げ、ニーズに対応した多様な教育プログラムの提供、企業内教育の受託などの推進に実績を上げつつある。たとえば地元のビジネスや企業、とくにマイアミでの成長が著しいファースト・フード産業などとの協力により、活発な『C O O P 教育』を実践しつつあり、体験学習やオン・ザ・ジョブ・トレーニングを通じて、学生に対する職業の保証と産業界への人材の提供という相互利益を図っている。この他にも、未成年の服役者をファースト・フード産業要員として育成するプログラムや、空軍への教育の提供など、さまざまな形で地域や企業との連携が図られており、教育需要に応えるのみならず需要の開拓も惜しまないというマイアミ・デイド・カレッジの態度に、地域短大の教育者としての自負心と経営者としての信念を見た思いがした。

アメリカ各地のコミュニティ・カレッジを調査してまず強く感じたのは、州による違いの大きさである。コミュニティ・カレッジの歴史において先駆的役割を果たしてきたカリフォルニア州では、最近では州による財政負担の増大、その結果としての州コントロールの強化と地域利益との対立、在学者数の減少と財政的逼迫、トランスファー機能の低下に伴う三層システム（10校のカリフォルニア大

学，19校の州立大学，および106校のコミュニティ・カレッジから成る）の破綻などの諸問題が表面化し，短大関係者は一様に強い危機感を抱いている。そしてコミュニティ・カレッジは今後一般教育，職業教育，あるいはコミュニティ・サービスの何れの役割を重視していくべきであるのか，その位置づけが州政府および短大自身によって改めて問い直されようとしている。

これに対し，フロリダ州のコミュニティ・カレッジは，財政の多くを州に依存しながらも強いローカル・コントロールの伝統に支えられ，4年制大学への進学機能も相対的に安定している。教育的に見ても経済的に見ても南部は西部に比べて依然として後進地域であり，地域に対する大学一，二年レベルの教育の機会の提供という意味でも，移民のための教育という意味でも，また産業の進出に伴う職業教育という意味においてもコミュニティ・カレッジが今後も果たしうる役割は大きいであろう。マイアミ・デイドの繁栄の背景にはこうした地域的条件があることを忘れてはならない。

地域差はカリフォルニアとフロリダにとどまらない。玉蜀黍畑と豚と牛に囲まれ，広大な地に人口の散在するアイオワ州，また岩永氏等が詳しい調査を行った，新興工業地域としての発展に賭ける南，北カロライナ州など，それぞれの地域の事情を反映して，コミュニティ・カレッジの位置づけは，州によって大きく異なる。アメリカのコミュニティ・カレッジを理解するためには，まず州による高等教育環境や条件の違い，またそこから必然的に生まれる州高等教育体制の相違を念頭に入れておく必要がある。

しかしながら，地域差とともに忘れてはならないのは学校差である。各地区（カウンティ）の理事会の強い運営自治権と学長等の経営手腕とに大きく支えられてきたコミュニティ・カレッジは，ひとつの州内といえども学校間の差が極めて大きい。例えば，同じフロリダ州でみても，学生数が千人に満たない小規模校からマイアミ・

デイドのようなマンモス校まで、トランスファー型から職業中心型まで、また伝統的な教室授業型から新しい通信技術を駆使した教育までと、サイズ、目的、方法などあらゆる点でコミュニティ・カレッジの姿は実に多様である。そしてこうした学校差が生まれるのは、地域短大がまさに『コミュニティ』のための『カレッジ』である由縁である。

マイアミ・デイドがそうであったように、そのなかで強い自治意識と優れた経営的嗅覚により敏感に地域ニーズに対応していくことに成功したところがコミュニティ・カレッジとして名を成すことになる。有名カレッジの学長が一様に闊達で行動的な優れた経営者の風格を持っているのは故なきことではない。また、ローカル・コントロールが弱まりつつある地域でコミュニティ・カレッジの衰退傾向がみられるのも偶然ではないであろう。

優れたコミュニティ・カレッジ・システムを誇ってきたフロリダ州にも最近になって変化の兆しがみえ始めている。例えば、州立大学ではここ数年の間に次々に学部前期課程を設置し、短大との競合関係が生まれつつある。また州政府は一昨年より短大卒業（AA取得）認定試験 C L A S T を導入したが、これは学生のレベルの維持を求める州立大学からの圧力によるところが大きい。こうした変化の背景には、優秀な学生の他州への流出を何とか食い止めなければという危機感がある。優秀な学生を他州に失うことは、州の高等教育システム、ひいては州の発展のうえで大きなマイナスであるという認識である。

当然のことながら、こうした動きはコミュニティ・カレッジの進退にも影響を及ぼさずにはおかない。一面から見れば、これは州コントロールの強化であり、短大の政策をローカルな視点のみならず、州の高等教育システム全体、さらに州を超えた視点からも捉える必要が出てきたことを示している。また別の面から見れば、これは学

部前期課程を提供する機関としてのコミュニティ・カレッジの伝統的役割が変化し始めたことを意味している。

巨大な田舎，アメリカ。広く，そしてあまりにも広いが故に強い地方自治と地元中心主義の伝統を持つアメリカ。コミュニティ・カレッジはそうした体質のなかから，地域の人々に等しく高等教育の機会を提供することを目的として生まれ育ってきた。コミュニティ・カレッジが東部ではなく，中西部や南部で発展してきたのであるとしたら，それは後者が前者より田舎であったためである。カリフォルニアのコミュニティ・カレッジはカリフォルニアが田舎色を失うとともに次第に非活性化していった。そして今日，田舎からの脱却を目指すフロリダ州において，我々はコミュニティ・カレッジの役割に変化の萌芽を見つけたような気がする。マイアミ・デイドは今後どのような道を選択していくのであろうか。地域のニーズを巧みに捉えて離さないそのしなやかな生きざまに脱帽しつつ，同校の今後の行方を大いなる関心をもって見守って行きたいと思う。